氏　　名	辻　　佐恵子
学 位 の 種 類	修　士（看護学）
学 位 記 番 号	修　士　第 １ ０ ７　号
学位授与年月日	平成２０年９月３日
学位論文題目	虐待者である親にかかわる看護職の態度の分析

別紙様式３

論　文　内　容　要　旨

※整理番号	111	(ふりがな) 氏　　名	つじ　さえこ 辻　佐恵子
修士論文題目	虐待者である親にかかわる看護職の態度の分析		

研究目的

本研究の目的は、看護職が虐待者である親にどのような態度でかかわっているかを明らかにすることである。

方法

本研究では、質的帰納的研究方法を用いた。研究協力者は、常時、被虐待児が入院している小児病棟に５年以上勤務した経験をもつ看護職で、本研究の主旨を理解し、研究者が行う面接に参加することを承諾した８名である。研究協力者の都合のよい日時および場所を決定し、研究の目的、方法、倫理的配慮等について、文書と口頭で説明を行い、研究参加の承諾を得た。面接は半構成面接を行い、その内容は、研究協力者の背景、虐待者である親に対する態度、虐待者である親に対して抱く感情である。面接時に録音したインタビューデータを逐語録にし、KJ 法の手法を取り入れて分析した。

結果・考察

逐語録を意味内容ごとに文節で区切り、1,001 の意味項目を抽出した。KJ 法の手法を取り入れて、研究目的に沿って主題が明らかになるまで統合した。7 のカテゴリー、49 のサブカテゴリーを抽出した。7 のカテゴリーは、【虐待看護に対する理念をもつ】、【親を理解しようとする構えをもつ】、【親へのかかわりに対する構えをもつ】、【親との距離をとる】、【親を気遣いながらかかわる】、【親に対して複雑な感情を抱く】、【医療従事者間で協働する】である。看護職は、自分たちの虐待看護に対する理念を基に親を理解し、親に配慮してかかわっていた。そこで生まれた複雑な感情を抱え、親とかかわることは非常に困難を伴うものであった。そのため、日常のかかわりで得た情報や、生じた感情を看護職間で共有したり、医師、専門機関などから助言を受けるなど【医療従事者間で協働】して虐待者である親にかかわっていたのは必要不可欠であった。他の専門職種からの助言は、看護職の【親との距離をとる】かかわりや、【親を気遣いながら】のかかわりを見直し、調整することを助け、かかわりにおいて生じた問題を看護職間で相談し、思いを共有することは、看護職がまた親へかかわっていこうとする姿勢に影響していた。そして、【医療従事者間で協働する】ことによって得られた知識や経験が、看護職を支える【虐待看護に対する理念をもつ】ことにつながっていた。

総括

本研究から、以下のことが明らかになった。

1. 虐待者である親へのかかわりにおける態度について、看護職により語られた内容から、【虐待看護に対する理念をもつ】、【親を理解しようとする構えをもつ】、【親へのかかわりに対する構えをもつ】、【親との距離をとる】、【親を気遣いながらかかわる】、【親に対して複雑な感情を抱く】、【医療従事者間で協働する】の７のカテゴリーが抽出された。
2. 看護職は、【虐待看護に対する理念】をもって親に向かっているが、その理念は、【親を理解しようとする構え】と、【親へのかかわりに対する構え】を形成していた。
3. 虐待者である親とのかかわりにおける看護職の行動傾向は、慎重に【親との距離をと】り、【親を気遣いながらかかわる】ものであった。
4. 看護職は、親を【理解しようとする構え】や【かかわりに対する構え】をもち【親との距離をと】り、【親を気遣いながらかかわ】っている。看護職は親に【親に対して複雑な感情を抱く】ため、さらに【親との距離をと】り、【親を気遣いながらかかわる】、そして【親に対して複雑な感情を抱く】という螺旋状の構造を呈していた。

（備考）１．研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。（1200 字程度）
　　２．※印の欄には記入しないこと。